

JAF AE Newsletter



No. 15 (July 2004)

第 15 回全国大会 / 電気通信大学にて開催

プログラム

日時：2004年7月3日(土)

- 大会総合司会：竹下裕子(東洋英和女学院大学)
 10:00 開会の辞：益田隆司(電気通信大学学長)
 Jie Shi(電気通信大学)
 会長挨拶：本名信行(青山学院大学)
 10:10 - 11:40 特別講演：
 Prof. John Maher(国際基督教大学)
 “Pidgins and Creoles in Japan:
 The Road from Jomon to the 21st Century”
 11:40 - 12:00 会員総会
 12:00 - 13:30 昼食休憩
 13:30 - 15:40 研究発表
 司会：徳地慎二(宮崎産業経営大学)
 1. 「英語の国際的普及にともなう英語変種間相互
 理解不全問題の解決法に関する一考察
 —Intercultural Accommodator の試みから—」
 梨本篤司(青山学院大学)
 2. 「日本とマレーシアの早期英語教育に関する一考
 察—両国の保護者の外国語意識を中心とする—」
 ベー・シュウキー(京都大学)
 3. 「『学習指導要領』における言語観の検証」
 仲潔(大阪大学)
 4. 「日本の英語教育における多様な英語の位置づけ
 —教師の態度の視点から—」
 佐々木香(蒲郡東高等学校)
 5. 「ノンネイティブの英語に慣れ親しむ重要性に
 関する一考察」
 高垣俊之(尾道大学)
 15:40 - 15:55 休憩
 15:55 - 17:55 シンポジウム
 テーマ：「ことばとアイデンティティ」
 司 会：小野原信善(香川大学)
 発 題 者：大原始子(桃山学院大学)
 河原俊昭(金沢星稜大学)
 鈴木義里(狛江高校)
 閉会の辞：日野信行(大阪大学)
 18:30 懇親会

第 15 回大会を振り返って

日野信行(大阪大学)



JAF AE 第 15 回全国大会は東京・調布の電気通信大学で開かれ、いつもながらたいへん盛況であった。充実した内容の発表の数々について限られた紙幅の中で紹介するのは至難

の業であるが、ごく要点だけ報告する。今回の大会では、特別講演とシンポジウムは主として社会言語学に関わる内容であり、一方、研究発表 5 件はすべて英語教育をテーマとしていた。

午前の部では、高名な言語学者であられる John Maher 先生(国際基督教大学)による “Pidgins and Creoles in Japan” と題する特別講演が行われた。ピジン・クレオール概念を日本の言語状況に適用したきわめて興味深い御考察であった。たとえば、日本語と日本手話との間にピジンが生まれているという御指摘や、在日米軍基地におけるピジンの存在の考察、あるいはピジンの観点からの最近のラップ音楽の分析をはじめとして、目を開かれるようなお話が続いた。また、WE 論の通説に抗する形で Japanese English を institutionalized variety であるとした分析も刺激的であった。

午後の研究発表に移ると、まず梨本篤司氏(青山学院大学・院生)の発表では、英語変種間の理解の困難性を解決するためのトレーニング・プログラムの試案が提示された。言語意識の観点から国際英語の教育の具体的な方法論を指し示すものとして、示唆的であった。続いて、ベー・シュウキーさん(京都大学・院生)の発表は、日本とマレーシアの早期英語教育に関して両国の保護者の意識を比較した、意義ある研究であった。分析の重点は両国の言語環境の差異から来る言語意識の相違に置かれていたが、その反面、子どもたちが人生を有利に展開するための手段として英語学習を推奨しようとする親心には普遍性も感じられる。仲潔氏(大阪大学・院生)は、

日本の戦後の学習指導要領を軸として、日本の学校教育における言語観の変遷について考察した。今日言うところの「国際英語論」に近い主張が戦後まもない時期の日本で唱えられていた事実など、いくつかの興味深い報告がなされた。

佐々木香先生（蒲郡東高等学校）は、国際英語の多様性が高校の英語教育の現場にどの程度反映されているかについて、教員の態度に焦点を当てながら、教員へのインタビューと授業観察の両面から分析された。その結果、教員の側は英語の多様性について認識はしているが、その目的に適した教材の不足や教授項目としての優先度の低さなどの要因から、実際に授業内容に反映されるケースは少ないことが判明した。「国際英語」教育の現状分析として価値の高い研究であると思う。高垣俊之先生（尾道大学）の御発表は、非母語話者の英語に慣れ親しむ重要性について考察するものであった。特に、その中で紹介されていた広島県の Super English Language High School の例は、高垣先生の御指摘どおり、きわめて画期的であると感じた。英語のノン・ネイティブであるフィリピン人の先生・オランダ人の先生・インドネシア人の助手による家庭科や政治経済の授業で、Content-Based Language Instruction の形での国際英語の授業実践として注目に値する。

総括するならば、この5件の研究発表から共通して浮かび上がってくるのは、国際英語の教育における language attitude の重要性である。確かに、多様な英語に対する偏見を持っていたのでは、国際コミュニケーションのための英語の習得は不可能である。

シンポジウムは、社会言語学の第一線で活躍されている有名な先生方を迎えて、「ことばとアイデンティティ」に関する最先端の議論が繰り広げられた。このシンポジウムの主題は、司会の小野原信善先生（香川大学）による冒頭での御説明にあったように、「多言語社会での言語選択が個人のアイデンティティ形成や確認にどのような役割を演じるか」である。フィリピンの言語政策に関する研究者として高名な小野原先生は、「輻輳するアイデンティティ」という表現を用いられ、この概念が本シンポジウムの基調となった。

シンガポールの言語状況に関する社会言語学的分析で知られる大原始子先生（桃山学院大学）は、言語あるいは変種の使用とアイデンティティとの多様な関係について、シンガポールを例として明解に呈示された。続いて、日本の言語政策に関する御著書でも有名な鈴木義里先生（狛江高校）が、「インドのような多言語・多文化国家においてインド人とは何か」という問いを出発点として、「アイデンティティの重層性」について論じてくださった。最後に、

フィリピンや日本の言語問題の研究で知られる河原俊昭先生（金沢星陵大学）が、金沢在住のフィリピン女性の言語アイデンティティについての分析を示された。複数の言語の使い手である点に自分の価値を見出していくという姿勢がフィリピン女性の間に見られることを報告し、多元的な言語アイデンティティの確立の可能性に言及された。パネリストによる御発表の後には、フロアからの御参加をまじえて全体討論に入り、活発な質疑とともに議論が深められた。

このシンポジウムを拝聴して、英語教育にたずさわる立場からあらためて痛感せざるをえないのは、従来の国際英語論に見られるある種の大雑把さである。EIL 論にせよ WE 論にせよ、これまでの国際英語論では、たとえば「シンガポール人のアイデンティティの表現手段としてのシンガポール英語」「日本人のアイデンティティの表現手段としての日本英語」といった切り口が一般的である。このようなとらえ方も、英語教育の「脱英米化」を推進する上では一定の機能を果たしてきたことは確かだが、しかしいかにも一面的で、過度の単純化であることは否めない。言語とアイデンティティの間の複雑な関係についての学問的成果を国際英語の教育実践にどのように反映させることができるか、自分としてもさらに考えていきたいと思う。

なお、小野原先生をはじめ今回のシンポジウムに登壇された先生方の御共著として、『ことばとアイデンティティ』という本が三元社からまもなく刊行される御予定とのことで、まことに楽しみである。

閉会后、大学キャンパス内の会館で開かれた懇親会もいつものごとく和気藹々で、楽しい交流のひとつときであった。最後になったが、関係者に対する心からの謝辞をもってこの報告を締めくくりたい。開会に際して自ら御言葉を賜った電気通信大学学長益田隆司先生、会場校として御尽力をいただいた Jie Shi 先生、JAF AE 会長本名信行先生、JAF AE 事務局の田嶋先生・河原先生・榎木蘭先生、司会の竹下先生・徳地先生をはじめ理事の先生方、発表者の先生方、そして御多忙の中を御参加くださった出席者の皆様に、深く御礼申し上げます。

特別講演 REVIEW

**Pidgins and Creoles in Japan:
The Road
from Jomon to the 21st Century**
John C. Maher (International Christian University)

Summarized by
SHI, Jie (Univ. of Electro-Communications)

In this featured speech delivered at the 15th National Conference held at the University of Electro-Communications in Tokyo, Dr. Maher first introduced

the multilingual nature of contemporary Japanese society and emphasized "the existence of various languages in Japan such as Chinese, Ainu, Korean, Portuguese, Deaf Sign and English. He then focused on pidgin as a product and a mainstream language variety of multilingual communities in Japan. From a historical point of view, he pointed out that the Japanese language was "an ancient Pidgin-Creole" as it was the result of "language fusion" as evident in several researches quoted. He further argued that historical changes in Japan, e.g., migrations in Yayoi period from the Asian continent, helped shape the Japanese language into a Creole.

In the second part of the speech, Dr. Maher gave a detailed analysis and discussion on Pidgin English in Japan. Though Japanese Pidgin was only partially documented, unlike other pidgins in the world, it was possible to divide it into three main types:

1. Extinct Pidgins (Yokohama Pidgin and Hamamatsu Pidgin)
2. Traditional Pidgins (Japanese-JSL Pidgins of Deaf Sign and Japanese- Okinawan Pidgins)
3. New Pidgins (Tourist Pidgins and Gastarbeiter Pidgins)

The preset paradigm for this discussion was based on the belief that Japan was multilingual instead of monolingual. Based on this notion, the following typology of English in Japan was given:

"English as an object of study (school and college, private study)

English as a cultural asset (Radio broadcasting)

English as the language of work (companies, institutions)

English as a medium of education (university course & supervision)

English as emblem (advertising, clothing decoration or accessory)

English as community language

Etc."

According to Dr. Maher, these types could be condensed into two major forms: Local Forms of English (LFE) and International Forms of English (IFE) for which two examples were provided, "English as a Community Language" and "Japanese-English as the Language of Work". The former was based on a neighborhood point of view. One example for this type was Hiroo area of Tokyo which used English in its street signs, restaurant menus, public notices and so on. In addition, English was used in daily oral communication. On the other hand, the latter showed the contexts and situations where English was used as a lingua franca or official language at workplace in Japan, which could be seen in the two examples given: English in Medical network and English in

publications especially in science field in Japan. Numerous research data proved that "Japan is Asia's biggest manufacturer of English." Nonetheless, both forms of LFE and IFE were not considered Pidgins.

In the third part of the speech, Dr. Maher presented four kinds of pidgins with the first being the Extinct Pidgin, Hamamatsu Pidgin. This pidgin was formed as a result of serving the Americans who lived in the city of Hamamatsu in 1950s. The second kind was a pair of pidgins, Ryukuan and Ogasawara Pidgins, and was considered the pidgins in Transition to Extinct. Ryukuan pidgin was a stabilized and occupational form; Ogasawara pidgin had two mixed language systems which had been absorbed into "Standard English" and "Standard Japanese" on the island of Ogasawara. The third kind was the Contemporary Pidgins, namely the Military Base Pidgins which were currently in circulation on the United States military bases in Japan. The last kind of the English Pidgin in Japan was the Genre Pidgins typically used in the artistic genres such as rap lyrics. This kind of pidgin contained the linguistic forms that were found unique only to these genres and were generally considered "pragmatically appropriate" in Japan.

In the conclusion of his speech, Dr. Maher appealed to the audience that pidgins in Japan must be recognized in any research on multilingual Japan and that more research should be done in this area.

S A R S 撲滅ラップ！

江田優子（ソニー(株)東アジア人事戦略部）

2003年8月、シンガポールのウェブサイトで次のようなページに出会いました。“PCK Sar-Vivor Rap: At a music store near you!”というタイトルがトップにあります。PCKとはシンガポールのTVコメディの主人公プア・チュカンのことです。シングリッシュを使用し、子供たちに人気があるため、かつては政府のスピーク・グッド・イングリッシュ・ムーブメント(1999年)でシングリッシュ撲滅のターゲットとされたキャラクターです。華系文化の色濃い庶民的イメージの彼が、ラップを歌うという mismatch に興味を惹かれました。

‘PCK Sar-Vivor Rap’のページを読み進むと、そもそもこのCD発売を企画したのがなんと政府=保健省(Ministry of Health)だったということが判明しました。ウィルス性の新型肺炎 SARS は、シンガポールをも席卷し、32人もの死者を出してしまいました。政府としては必死で SARS 撲滅対策に乗り出さなくてはならず、国民的人気のある PCK を登場させ、このようなラップをリリースすることになったというわけなのでしょう。さらに検索を続けてい

くと、なんとこのラップの歌詞はシングリッシュだったことが分かりました。

ここで、問題の歌詞の一部をご紹介します。

(詳しくは

<http://ch5.mediacorptv.com/wassup/ch5announcements/view/194/2/.html>を参照)

Lyrics to 'Sar-Vivor Rap' by PCK Pte Ltd

SARS is the virus that I just want to minus
SARS はマイナスしたいウィルスさ
No more surprises if you use your brain,
use your brain, use your braaaainnn,
頭を使えば、頭を使えば...もう驚かない
Can't SARS me baby, and I don't mean maybe
ベイビー、きみはぼくを
SARS にやできないぜ、絶対にね
You must be steady, just use your brain,
use your brain, use your braaaainnn,
きみは慎重にやらなきゃいけない、
頭を使え、頭を使え、あ～たまをね

政府サイドである健康推進委員会のスポークスマンは、「SARS 防止対策持続のための重要なメッセージを伝えるのに、気軽な方法としてシングリッシュを使用しました。SARS について国民に情報を伝達するためには、方言の使用も含む様々なアプローチが行われたのです」と声明しています。なぜラップなのか、なぜシングリッシュなのかという問に対する答えは、「気軽な」(Light-Hearted)というのがキーワードのようです。政府は、国家の一大事の際には、若者やノン・エリート層にも分かりやすく、親しみやすいという情報の伝達法が最も効果的だという結論に達したのでしょうか。それにしても、シンガポール政府のこの柔軟性には見習う点があるのかもしれない。

新 刊 書 評

『言語政策としての英語教育』

山田雄一郎著 (溪水社)

ISBN: 4-08-720217-8 価格 3,675 円(税込)

評者: 河原俊昭 (金沢星稜大学)

本学会員の山田雄一郎氏によって『言語政策としての英語教育』が2003年の6月に溪水社より刊行された。この本の最大の特徴は、近年の日本の英語教育界の動きを、言語政策の視点から、明快な論理で語っている点である。

近年の日本の英語教育界の出来事は非常に目まぐるしい。「JET プログラム」、「小学校への英語教育の導入」、「英語第2公用語論」、「英語が使える日本人のための戦略構想」など、次から次と日本の英語教育に衝撃を与える言語政策が登場している。

これらの一連の言語政策は、はたして何を指しているのか、その背景には何があるのか、その意義は何であろうか。これらは、英語教員ならば避けて通れない問いかけであろう。

しかし、英語教員の多くは、毎日の授業の準備に追われて、これらの政策を評価するだけの時間的な余裕はないのではないかと。そんな中で、近年の英語教育政策に関するすぐれた鳥瞰図となる、この本が刊行されたのである。

この本の内容であるが、スペースの関係で、各章のタイトルだけ紹介したい。序章「言語政策確立の必要性について」、第1章「動き出した世界の英語」、第2章「JET プログラムと英語教育」、第3章「小学校における英語教育」、第4章「英語公用語論の思想」、第5章「日本人に求められる英語」、終章「日本における多言語使用の可能性」である。章によっては、政府の言語政策に対して、手厳しい批判が見られる。しかし、それは、決して批判に終わることなく、対案も示されている。批判の言い放しではなくて、建設的な意図が見られる点は好ましい。

評者が一番関心を持った点は、国際理解教育に関する記述である。英語教員の多くは、英語教育を通して国際理解能力を高めることができる、つまり「英語教育 = 国際理解」との等式を信じている。しかし、この本では、「国際理解とは世界認識のことであり、世界認識とは、学習者の第一言語を通して確立されることが望ましく、もっとも効率がよい」との趣旨が述べている。これは傾聴すべき意見であろう。国際理解教育を充実しようとするならば、母語である日本語の問題と絡んでくるのは必至である。真の国際理解教育を目指すならば、それは英語によるのか、日本語によるのか、我々も深く考えなければならぬ。

この本は、最新の話題を取り扱っている。最新の話題とは、実は、すぐに古くなる話題であると言われる。この本は、たしかに最新の話題を取り扱っているが、記述は、英語教育の根本につながる点が多く、論点は常に新鮮である。近年の英語教育のホットな話題を根本から深く考えてみたい人々に広くこの本を勧めたい。

『世界の外国語教育政策：

日本の外国語教育の再構築にむけて』

大谷泰照他共編著 (東信堂)

ISBN: 4-88713-543-2 価格 6,571 円(税別)

評者: 山田雄一郎 (広島修道大学)

世界の外国語教育事情を知るための最新資料

本書は、大学英語教育学会 (JACET) 関西支部の有志 15 名の共同執筆になる 500 ページを超える大

冊である。「アジア英語」学会からは、相川真佐夫さん（編集・執筆）、河合忠仁さん（編集・執筆）、築瀬正子さん（執筆）の三人が参加しておられる。

世界の外国語教育事情については、これまでも、書物や論文の形でおりおりに紹介されてきたが、それらは、多くの場合、韓国とかカナダといった個別の国単位のものであった。また、アジア諸国を紹介した書物もあるが、世界を視野に入れ、全体を統一的に扱ったものとしては本書が最初かと思う。その資料的価値は高く、参照文献として手許に備えておきたい書物である。

本書は、第1編「東アジアの外国語教育政策」と第2編「先進諸国の外国語教育政策」の二部から構成されている。取り上げられている国は、第1編で6ヶ国（韓国、中国、香港、台湾、マレーシア、日本）、第2編で1地域（EU）8ヶ国（ドイツ連邦共和国、スペイン、オランダ、イングランド、スイス、カナダ、アメリカ合衆国、オーストラリア）、合計1地域 14ヶ国である。章立ては、およそ国単位となっており、その基本構成は、以下の通りである。

- I 歴史・変遷
- II 教育政策・教育制度
- III 教科書・教材
- IV 教員養成・教員資格
- V 入試制度・入試
- VI 考察・所感
参考文献

なお、上記の基本構成は、各国の事情によって多少の変動がある。特に第2編については、入試制度・入試の項の欠けている場合が多く、かわりに第1編にはない語学力の評価の項が加わっている。これらは、編集上の不統一と言うよりも、それぞれの国や地域の特徴を活かすためにやむを得ない記述上の異同であり、編集者の苦心が読みとれるところである。

編集上の工夫はいろいろな箇所に見て取れるが、全体の内容はおよそ上記の基本構成に沿っており、各項の記述は簡にして要を得たものとなっている。たとえば、歴史・変遷の項では、その国の歴史的背景を絡めながらも記述の中心は、言語政策・言語（外国語）教育の歴史・変遷に置かれている。平均5ページほどの限られた紙数で、その国の歴史や言語政策の移り変わりをまとめるのは簡単な作業ではない。また、教科書・教材の項も統一が難しいテーマである。検定制度のある国とそうでない国では、得られる資料に大きな差があるため、結果的に全体の記述がまちまちになっているのはやむを得ない。これに対して、記述の足並みが最も揃っているのは、教育政策・教育制度の項である。読者は、この項を国ごとに比較することによって日本の置かれている

状況をより鮮明に把握できるはずである。

考察・所感の項も面白い。この項には、日本の外国語政策を考える上で参考となる示唆が多く含まれている。たとえば、ヨーロッパ連合の章では、「言語的に同属関係にある EU 諸国が相互に複数の外国語を学びあうことと、同語族ならぬ異語族の外国語を学ぶ日本の状況とを、言語的距離を度外視して同列に論ずることには慎重であるべきではないか」という優れた指摘が見られる。その他、中国、台湾、イングランド、スイスの章の考察・所感において参考になる記述が多い。また、各章の最後にある参考文献も充実している。

本書には、いま述べたこと以外に、ヨーロッパの多言語主義、入試制度の違い、語学力の基準、言語環境の違いなど興味深いテーマが数多く含まれている。いずれにしても、歴史や制度、思想の異なるさまざまな国を同じ土俵に上げて紹介するのは難しい。その意味で、本書は、複雑多岐に渡る資料をよく一書にまとめたものとして高く評価できる。この研究が、将来、東欧諸国やアフリカ、南アメリカなど、われわれに馴染みの薄い国々の言語政策へと敷衍・発展していくことを期待している。

新 刊 案 内

『世界は英語をどう使っているか：

＜日本人の英語＞を考えるために』

竹下裕子・石川卓雄編著（新曜社）

ISBN:4-7885-0906-7 価格 2,310 円（税込）

『多言語社会がやってきた：

世界の言語政策 Q&A』

河原俊昭・山本忠行編（くろしお出版）

ISBN:4-87424-307-X 価格 2,200 円

JAF AE STUDY TOUR in T a i w a n

相川真佐夫（京都外国語短期大学）

2004年3月23日～27日、JAF AE のメンバー20名は台北市へスタディツアーに出かけました。小学校訪問、特別講義、師範大学訪問を含めた研修は、訪問の期間や移動のことを考えると、ちょうどよかったのではないかと思います。

さて、今回訪問した台北市立永安国民小学は、創立間もない新しい学校で、とても綺麗な学校でした。台湾ならではの温かい歓迎を受け、校長先生の日本語での挨拶、英語教員とのディスカッションと、大変良いムードの中で交流を深めることができました。英語の授業は1年と4年生2クラス分の合計3時間を用意してくださいました。活発な授業、絵本

を読み聞かせる授業など、バラエティ豊かな英語授業を観させていただきました。また、最新設備を備えた施設、オープンスペースの教室など大変興味深い学校訪問でした。ついでに給食も試食致しました。この学校の訪問については、台北駐大阪経済文化辦事處のご高配により実現できたものです。この場をお借りして、御礼申し上げます。

特別講義は、廖咸浩氏（台湾市文化局長・国立台湾大学）の“The Obsession with Modernity: Why English as a Second Official Language?”、陳淑嬌氏（国立嘉義大学）“The Spread of English in Taiwan”でした。廖氏には、言語政策に関わる立場と学者からの立場から、英語第2公用語論についてお話し頂きました。また、陳氏には、台湾での英語の広がりについて、独自のリサーチを紹介して頂きました。また、陳氏から参加者に1人1冊ずつ、講義と同題のご高著をプレゼントして頂きました。

国立台湾師範大学の訪問では、主任の張武昌氏による「台湾の英語教員養成制度」の概説、および葉錫南氏の指導による英語教育法の模擬授業を参観させて頂きました。師範大学は、日本の統治時代に立てられた建物がそのまま残っており、また周囲に点在する瓦屋根の日本家屋と合わせて、何か不思議な時間と空間を感じました。夕方の懇親会には、教授5名が参加してくださり、大変有意義な時間を過ごすことができました。

その他、英語教育や言語学を扱う出版社、教科書センター、教科書会社、国民中学の訪問をはじめ、中正紀念堂、孔子廟（学問の神様）、故宮博物院への観光、夜市への散策、A～C級グルメ料理、文化的体験、English Taxi など、盛りだくさんの内容に参加者一同、気も身も満腹になったことと思います。

総統選挙直後のゴタゴタで、緊張する市内の様子が日本のテレビでも流れていましたが、台湾総統府の拝観以外は全て予定通りの計画で進めることができました。唯一残念だったことは、毎日雨で傘を手放せなかったことです。

なお、現在、この度の台湾研修ツアーで受けた講義、学校訪問、感想、記録をモノグラフとして刊行することを計画しております。ご期待ください。

台湾ツアー参加記

榎木蘭鉄也（秋田県立大学）

2004年3月、私は日本「アジア英語」学会の台湾研修ツアーに参加した。本学会の海外研修ツアーは今まで3回おこなわれたが、だんだん内容が良くなってきていると感じる。以下、簡単に研修内容とその感想を書いてみたい。

研修ツアーのメインは授業見学であった。小学校や中学校の授業を見学したが、児童生徒からも教師

からも学習に対する熱心がひしひしと伝わってきた。ツアーでの正式な授業見学は、台北でも指折りの優秀な学校の見学であったが、自由行動時間には普通の中学校も見学した。優秀な学校では、児童生徒の英語力が非常に高く驚いたが、普通の中学校では落ち着きのない生徒や恥ずかしがり屋の生徒もいたので、少し安心した。それにしても、教師はもちろん教育実習生の英語力の高さには脱帽した。

研修ツアーには、台湾の著名な学者を招いての特別講義もあった。お一人目は、社会言語学的に台湾英語について概説された。お二人目は、台湾大学教授兼台北市局長といういかめしい肩書きの方だったが、気さくな感じの方で、流暢なアメリカ仕込みの英語で漫談調に、台湾では英語は公用語にはならないし、なる必要がないという旨を話された。お二人目の方は男前でファッショナブルな方で実年齢よりもずっと若く見えた。大学ではさぞ女子学生に人気があるだろうと思った。

その他、台湾師範大学で英語教授法の授業を見たが、学生のレベルが非常に高かったのが印象的であった。また、見学前に師範大学の先生から、簡単なレクチャーがあったが、さすが「先生の先生」だけあって、お話いただいた内容は簡潔で非常にわかりやすかった。私の授業もかくありたいと思った（が難しいですね）。

授業見学と講義以外にも、台湾に通じておられる相川先生ならではの企画があった。それは、夜市の見学と台湾料理であった。特に、夜市の見学では、参加者一同、モノレールに乗ってぞろぞろと相川先生の後について行った。そのなかには中国系の参加者もおおられたのだが、なんとなく相川先生の方が中国人らしくと思ったのは私だけではなかろう。全員での会食はおもに高級料理屋でおこなったが、自由時間に安くて汚い(?)店にもつれていただいた。率直に言うと、高級な店も安い店も非常に美味かった。台湾滞在中は台湾料理ばかり食べていたが、いまでも時々その美味さを思い出さずほどである。

最後になるが、今回のツアーを企画実施した相川先生のご苦勞には頭が下がる思いである。相川先生は勤務先を替えられる直前の忙しいなか、いやな顔一つせず、まさに昼夜を問わずツアーの世話をしてくださった。参加者の一人としてあらためてお礼を申し上げたい。

分科会（言語政策研究分科会） 設 立 の ご 案 内

河原俊昭（金沢星稜大学）

アジア英語学会の中に、標記の分科会を設立したいと思います。目的は、アジア諸国の英語教育を言語政策の観点から研究することです。具体的な活動

ですが、電子メールでの意見交換、読書会、年に数回のミーティング、ミーティングの後のお酒を交えた懇親会（これが活動の中心になりそうですが）などを考えております。ゆくゆくは、活動の成果を何らかの形で公表したいと考えております。当面は河原が世話人になりたいと思います。関心のあるかたは河原俊昭（金沢星稜大学）まで、メールにて、ご連絡下さい。 tokawahara@m2.spacelan.ne.jp

『アジア英語研究』 編集委員会からのお知らせ

委員長 津田早苗（東海学園大学）

2004年度からの編集委員4名加藤三保子・津田早苗・日野信行・吉川寛（50音順、敬称略）が決まりました。4年間勤めて下さった吉川委員から、委員長が津田に交代しました。よろしくお願い致します。

紀要第6号の刊行（吉川前委員長より）

本学会紀要『アジア英語研究』第6号が刊行されました。既にお手元に届いていると思いますが、編集時には、多くの会員の方々に、査読をはじめ色々ご協力をお願い致しました。紙面を借りてお礼申し上げます。

2004年度、学会紀要とモノグラフの原稿募集 JAF AE紀要『アジア英語研究』第7号原稿募集

原稿締切: 2004年11月末日

投稿規程: 「アジア英語研究」巻末の「投稿規程」を参照。

査読を経て掲載の可否を決定します。

モノグラフ原稿募集

原稿締切: 今年度は随時

（来年度の締め切り時期を現在検討中）

投稿規程: 『アジア英語研究』「投稿規程」に準ずる。
出版助成金: 1件につき10万円を限度とし、各年度2件まで助成します。（今年度は既に2件の提案があります）

<原稿提出先>

〒468-8514 名古屋市天白区中平2-901

東海学園大学人文学部 津田早苗研究室

「アジア英語研究」編集委員会

（投稿規程には事務局宛とありますが、今年度から編集委員会に直接お送りください）会員の皆様の投稿をお待ちしています。

JAF AE紀要の『アジア英語研究』の販売

代金の2,000円（1冊分、名目は資料代）と送料を事務局宛に送れば購入できます。学会の広報や財政にも貢献しますので、非会員の方々にお勧めいただければと思います。また、モノグラフも販売中（創刊号500円、第2号600円）です。こちらの方もよろしくお願い致します。

事務局からのお知らせ

研究助成プログラムについて

アジア英語に関する研究を振興するために、会員の有意義な研究に資金援助する研究助成プログラムを始めます。下記のプログラム規則をご覧ください。なお、申請書は学会URLからダウンロードできます。ご質問があれば事務局の榎木園までお問い合わせください（enokizono@akita-pu.ac.jp）。

日本「アジア英語」学会研究助成プログラム規則

1. 目的
本会はアジア英語に関する研究を振興するために、会員の有意義な研究に資金援助し、これを助成する。
2. 研究助成の概要
(1)個人研究、共同研究ともに、毎年1件あたり10万とし、2件以内とする。
(2)用途は、資料図書費、消耗品費、通信・運搬費、謝金、旅費などとする。
3. 応募資格
本会の会員で、該当年度の会費を納めている者。
4. 応募の受付
(1)応募期間は、毎年、1月1日～1月31日。
（ただし、2004年度は9月1日～9月30日）
(2)応募用紙は、学会のホームページよりダウンロードすること。
5. 選考
(1)理事会のもとに選考委員会をおき、助成応募の選考原案を作成する。
(2)理事会は選考委員会原案を審議し、決定する。
(3)応募者には、同年3月31日（2004年度は同年11月30日）までに、選考結果を文書で通知する。
6. 報告
(1)研究助成費を受けた者は、助成年度の3月31日（2004年度は2005年11月30日）までに会計報告書（領収書添付）を学会事務局に郵送する。
(2)翌年度の本会大会で研究成果を発表する。
(3)学術誌（本会紀要など）に投稿するときは、『本研究は日本「アジア英語」学会から研究助成をうけたものである』という文言を明記する。

The Japanese Association for Asian Englishes Regulations for the Research Grant Program

1. Objective

The Association provides research grants to its members in order to promote research on Asian Englishes.

2. Outline of the Research Grant

- (1) The Association will provide 100,000 yen to each grant program irrespective of whether a grant application is done by an individual or a group. Up to two programs will be approved annually.
- (2) The funds can be used for research materials, books and magazines, consumables, communication and correspondence, honoraria and travel expenses.

3. Eligibility

Only the members of the Japanese Association for Asian Englishes who have duly paid the membership fee for the fiscal year of the application are eligible for making an application.

4. Application Procedure

- (1) Applications are accepted between January 1st and January 31st every year (As for 2004, temporarily, applications are accepted between November. 1 and November 30, 2004).
- (2) Application forms can be downloaded from the association's webpage
[<http://www1.linkclub.or.jp/~jafae/>].

5. Screening

- (1) The board shall appoint the members of the screening committee and delegate them the mandate of screening. The committee shall decide the screening procedure and make a list of successful candidates.
- (2) The board shall deliberate and decide on who will be chosen.
- (3) Applicants shall be informed of the screening results in writing before March 31 (in 2004, before November 30).

6. Obligations

- (1) The recipients must send by post an accounting with receipts on the use of the grant to the Association's Secretariat by May 31st in the following year. (As for 2004 recipients, the above must be done by Nov. 30, 2005.)
- (2) The recipients of the grant are required to make oral presentations at the association's annual conference in the following year.
- (3) Whenever the recipients of the funds write a paper for any journal including *Asian English Studies*, they must specify JAF AE as a sponsor of the funding in the paper.

次の全国大会について

第 16 回全国大会は、12 月 4 日（土）に宮崎市の宮崎産業経営大学で開催いたします。大会実行委員長は同大学の徳地慎二理事です。

第 16 回全国大会研究発表者募集

第 16 回全国大会（2004 年 12 月 4 日（土），宮崎産業経営大学）で研究発表を希望される方（会員に限ります）は、要旨（日・英どちらか）を A 4 用紙 1 枚程度にまとめて、10 月 8 日（金）必着で、大会担当理事の榎木園までお送りください。

<送り先> : E-mail : enokizono@akita-pu.ac.jp
FAX : 0184-27-2183 (榎木園宛と明記)

**CALL FOR PAPERS for the 16th
National Conference on December 4, 2004
at Miyazaki Sangyo Keiei University**

The Conference Committee invites submission of abstracts for papers. Submission is by e-mail, fax or mail. Abstracts for papers should be no more than 250 words in length. The deadline is Friday, October 8th, 2004. Please send it to Prof. Enokizono. E-mail: enokizono@akita-pu.ac.jp, or Fax (0184-27-2183 Attention: Prof. Enokizono).

海外研修について

次の海外研修旅行は、来年にタイへ行くことになりました。現在、日程や訪問先などの詳細を検討中です。詳しくは、決まり次第お知らせいたします。

国際会議情報（アジア周辺）**The 12th Annual Korea TESOL 2004 International Conference, "Expanding Horizons: Techniques and Technology in ELT"**

Date: October 9-10, 2004

Venue: Sookmyung Women's Univ., Seoul, Korea.

Web: <http://www.kotesol.org/conference>

English Teacher's Association (ETA) 13th International Symposium and Book Fair on English Teaching, " Trends in Asian English Language Teaching (ELT): Theory and Practice"

Date: November 12-14, 2004

Venue: Chien Tan Overseas Youth Activity Center, Taipei, Taiwan.

Web: <http://www.eta.org.tw>

The Science and Art of Language in Teaching (SALT) International Conference, "Change: Embrace the Challenge"

Date: November 22, 2004

Venue: The Bayview Beach Resort, Penang, Malaysia.

Web: <http://www.perlis.uitm.edu.my/SALT>

CLASIC 2004 - The Inaugural CLS Conference, "Current Perspectives and Future Directions in Foreign Language Teaching and Learning"

Date: December 1-3, 2004

Venue: Centre for Language Studies, National University of Singapore

Web: <http://www.fas.nus.edu.sg/cls/clasic2004>

The 25th Annual Thailand TESOL International Conference Thailand TESOL, "Surfing the Waves of Change in ELT"

Date: January 20-22, 2005

Venue: The Imperial Queen's Park Bangkok, Thailand

Web: <http://www.thaitesol.org>

編集後記：これからアジア方面へフィールドに出かける先生も多いのではないのでしょうか。気をつけてお出かけください。夏バテ予防に、紀州の南高梅梅干しをお勧め致します。さて、今回号から榎木園氏から引き継ぎ、相川が編集担当することになりました。皆様の投稿をお待ちしております。

2004 年 7 月 15 日発行

編集・発行 日本「アジア英語」学会

代表者 本名信行

編集長 相川真佐夫

発行 (有)タナカ企画

事務局 〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘 1 - 25

白百合女子大学 田嶋宏子研究室内

FAX: 03-3326-4550 E-mail: tina2@gol.com

学会ホームページ : <http://www1.linkclub.or.jp/~jafae>

年会費振込先 : 郵便振替 00280-8-3239

<< JAF AE Secretariat >>

Professor Hiroko Tina Tajima

Department of English, Shirayuri College

1-25 Midorigaoka, Chofu-shi, Tokyo 182-8525 JAPAN

FAX: 03-3326-4550 E-mail: tina2@gol.com

JAF AE's homepage: <http://www1.linkclub.or.jp/~jafae>

JAF AE's postal transfer account number: 00280-8-3239

